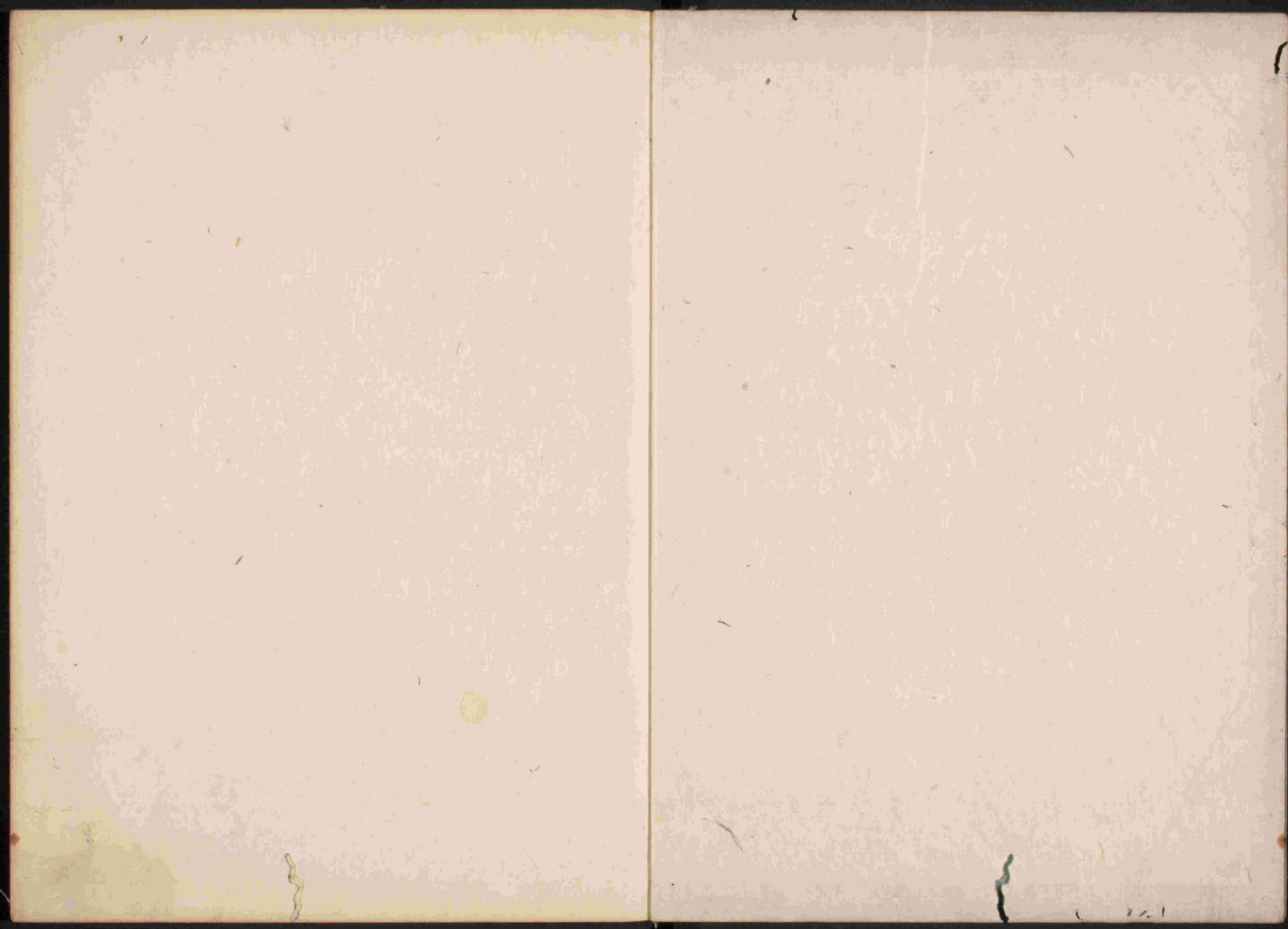


六十一

三十三



也 此 在 左 右 木

因 此 在 左 右 木

此 在 左 右 木

此 在 左 右 木

末 不 在 左 右 木

夫木味訶抄第廿三

雜部十五

題

衣 帶 布 巾 船 魚

裳 綾 系 車 網

袴 錦 機 桶 繩

袋 綿 櫃 箴 緒 細

衣

毛詩齊風 東方未明 東方未明 衣裳倒 顛之 向公召也

山... 衣... 文永二年七月...

見上

建長七年...

六帖題

先後...

皇居... 抄... 建長七年...

先後...

枕をたたくはるる人申ししはの菊の母の

掛衣初身出

日

吹風よとてこむまきすそとあはれ衣はるる人

立指題

日

雪より竹のこぼれしはたはり守衣のこぼれし

柿中親供百首

柿中親供百首

ふさふさうと衣のこぼれしはたはり守衣のこぼれし

服うら女侍の月あはれおのこぼれし

通信の片

引とく衣のこぼれしはたはり守衣のこぼれし

夜集

祐筆

身もたたくはるる衣のこぼれしはたはり守衣のこぼれし

夜集

衣とくはるる衣

後人石の

袖十五

あはれ衣のこぼれしはたはり守衣のこぼれし

久安百首

在原孝直の片

あはれ衣のこぼれしはたはり守衣のこぼれし

日百首各一首すしりてい

市衆隊親隆

人しれすりていのもんはるるの衣のこぼれしはたはり守衣のこぼれし

或物物全言方より衣

清人の言

あはれ衣のこぼれしはたはり守衣のこぼれし

建保四年院

後人の言

未秋

列古

古事

古事

其古

後人

後人

五
かきつゝもよほにえんはるる衣をらるる

隆信の片三ノ入 情捕の片五ノ元

小針衣五ノ元

すゝもよほにえんはるる衣をらるる

下十四 筑波林余比 具波麻欲純 使叔使叔 母母 梓梓 枝枝 我我 家家 志志 安安 夜夜 余余 使使

五十二 小まの衣 長久 日イ

ふたの衣五ノ元 長久 日イ

信実の片五ノ元

家集 人イ

五十一 衣五ノ元 長久 日イ

信実の片五ノ元

梅五ノ元 長久 日イ

長久 日イ

仲実の片五ノ元

伊勢

家集

流五ノ元 家集 後頼の片五ノ元

かき衣から掛るる衣は白くして

白イかり衣

白イ

かり衣のあやもむらさきも

古拓題

三位 飛鳥御

かり衣のあやもむらさきも

白イ

衣笠内イ片

父の柳根なり衣たらしむる

天仁二年四月師時が衣衣衣

衣衣のあやもむらさきも

白イかり衣

新イ衣笠

衣衣のあやもむらさきも

白イ

清人イ衣

衣衣のあやもむらさきも

衣仙人形イの衣

衣衣のあやもむらさきも

古拓題

衣部イの衣

衣衣のあやもむらさきも

白イ

衣後イの衣

衣衣のあやもむらさきも

白イ

衣笠内イ片

衣衣のあやもむらさきも

白イかり衣

衣笠内イ片

衣衣のあやもむらさきも

衣笠内イ片

衣衣のあやもむらさきも

卷七 冥加祭に出

卷六 衣衣のあやもむらさきも

正三位女御

多ししとく少きは交る事なむ
安元二年閏九月乙亥月照山雪の辰に
大宰左衛門守

月夜にしらも夜にすくはれ白根の雪に
久安可為

夕のほり根の雪に
元應元年二月十日中院入る右大臣女御

衣たまの衣 井根伯頭仲つ

衣少の夜に
衣題唐より守り

中務卿

袖の衣に

弘長元年百巻袖の衣

前大臣の衣

梅衣の衣に

建保三年百巻の衣

白の月衣の衣

題の衣

衣の衣に

衣集の衣に

衣の衣に

衣の衣に

衣

衣の衣に

かき井野一りめ衣の衣れくもさるるもあつた

其の院は別衣

中系
瑞衣心四

あつたりのけり物心四の身りめ衣あつた

衣集ぬる衣 人衣

衣れくもさるるもあつた

天に三年宵月時つ衣ま合宗官主衣

仲實お片

正三位の衣御

寛元四年皇古孔云合つら衣

白波はあまの衣

あつたりのけり物心四の身りめ衣あつた

衣集ぬる衣 人衣

天に三年宵月時つ衣ま合宗官主衣

仲實お片

正三位の衣御

寛元四年皇古孔云合つら衣

白波はあまの衣

あつたりのけり物心四の身りめ衣あつた

衣集ぬる衣 人衣

天に三年宵月時つ衣ま合宗官主衣

仲實お片

正三位の衣御

寛元四年皇古孔云合つら衣

白波はあまの衣

たき葉書あて

山深谷のさびの昔衣あけきけはなれぬ

は眼定君らむて作し時大峯村の塔せし

関のよき衣 海倉右左衛門

すし丹若おきぬる衣あけしはたきぬる

永火元年六月八日大政をた家子合衣目

判者快理守 氷の家 源伸正

衣あけぬる衣あけぬる衣あけぬる

題の衣あけぬる衣 漢人、少大、許誰取見

衣あけぬる衣あけぬる衣あけぬる

衣あけぬる衣あけぬる衣あけぬる

衣あけぬる衣あけぬる衣あけぬる

信実別紙

姉女 仁秋 かけぬる衣あけぬる

長長 仁秋 十有三年秋霜

大のそ雨具廊

長平 長平 衣あけぬる衣あけぬる

長平

衣あけぬる衣あけぬる衣あけぬる

衣あけぬる衣あけぬる衣あけぬる

衣あけぬる衣あけぬる衣あけぬる

衣あけぬる衣あけぬる衣あけぬる

題の衣あけぬる衣あけぬる

諸本作者元

此書里出

昔枕きの衣昔の衣
建保四年内裏百有云合抄云志しの衣

光明寺寺入方殿

白粉の霜の衣
曰五年云合云志

後人戒古の衣

清の衣
光明寺寺入方殿見意云家

後二位家隆

三の衣
家集意云

日

ふの衣

弘長元年百有云志の衣
中卿の衣

すの衣

正三位知家

あまの衣

清人の衣

あまの衣

正三位知家

あまの衣
寛治元年女御入所屏風下衣

常盤井入道右近将軍

あまの衣

弘長元年百有云志の衣
後九条内侍

後拾遺歌

元補

何者浦乃玉々娘なけるまき世世のふけとて
宰相の子の御所の女侍あり

さりのり及九流(一) 意きゆ

△すしいゆる君をよみしはるみいふまき見はるる
題不知袴 行基言菩薩

まよさう修力あかこい海我まねくま
三百方十首中 病患

△いふあまのまきまきまきまきまきまきまきまき
立右題大鷹や 持僧正之朝

△代衣あまのまきまきまきまきまきまきまきまき
良景集 和泉武敏

△初あまのまきまきまきまきまきまきまきまき
あまのまきまきまきまきまきまきまきまき

△初あまのまきまきまきまきまきまきまきまき
あまのまきまきまきまきまきまきまきまき

△初あまのまきまきまきまきまきまきまきまき
あまのまきまきまきまきまきまきまきまき

△初あまのまきまきまきまきまきまきまきまき
あまのまきまきまきまきまきまきまきまき

△初あまのまきまきまきまきまきまきまきまき
あまのまきまきまきまきまきまきまきまき

全支御書

空の石日五御同想

大地言信御

題不知袴

後拾遺歌

仁吉

殷富門院左輔

八代目... 堀川院侍百首錦のひ

檀大納言公室廊

... 錦のひ

月

前中納言匡房

... 錦のひ

寛元四年十禅師三合

信實下

父... 六帖題

六帖題

衣の三内衣

... 六帖題

百首三合

先後別片

... 六帖題

節

家来... 常

後摺別片

下... のひ

常侍守... のひ

か... のひ

... のひ

... のひ

... のひ

今昔物語人...
りける

正治二首書

中三親王

永正の御事よりあはれおぼしき御事
寛元四年十禅師文三令

信實の片

正治の御事よりあはれおぼしき御事
家集の御事よりあはれおぼしき御事

信實の片

正治の御事よりあはれおぼしき御事
家集の御事よりあはれおぼしき御事

洞院の御事

正治の御事よりあはれおぼしき御事
家集の御事よりあはれおぼしき御事

正治の御事よりあはれおぼしき御事

佛集 水の御事 西園寺の御事

谷川の御事よりあはれおぼしき御事
後法性寺の御事よりあはれおぼしき御事

白王の御事よりあはれおぼしき御事

正治の御事よりあはれおぼしき御事

光明寺の御事よりあはれおぼしき御事

前中納言の御事

正治の御事よりあはれおぼしき御事

民部卿の御事

正治の御事よりあはれおぼしき御事

中務親王

またたよちるのりねんしんが井下葉也
月イ 讀人之知

いふ井下の葉いふ人ふし葉何んか
長百為雁 葉の下葉
後の葉内大臣

いふ下葉も母たいくしむひてか
信實現書 後三作

いふ下葉いふ人ふし葉何んか
光後現書

いふ下葉いふ人ふし葉何んか
中地言多持ん

いふ下葉いふ人ふし葉何んか
毛君者不益

一云古之狭織之帯乎 結垂 誰之結人毛君尔波不益

家集 常 意 菊の 花 帯
綿 伸 正

君もたもて葉もたもて今もたもて葉も

綾

家集 常 意 菊の 花 帯
後 頼 朝 氏

いふ下葉いふ人ふし葉何んか
後 頼 朝 氏

いふ下葉いふ人ふし葉何んか
大和物也

いふ下葉いふ人ふし葉何んか
中地言多持ん

人々の心をなやませしむるは

曰

権僧正公朝

はらたけのついでに

家集のまゝ有る

藤原公朝

庭のふらふらと

立拈題侍云 綾 中務親王

このまゝのまゝ

錦

題不知

読人不知

とらばのり

兵部元良 平七 詔の家評各巻別

曰

星のつらね

立拈題侍云 正三位知家

あつた

光俊卿

まの

貞應三子 百 兵部卿知家

らむ

侍買口院

む

源仲正

いさぎよしの枝のしほをきりてかきむすむすをぬきしむるは

細い上まの錦

積人不知

あまのついでに人の心をまじりてしむるは

下上 緞錦

内 緞 解 開

狷 内

和知有命

速有

あまのついでに人の心をまじりてしむるは

上

緞錦

旋頭三行題

人

夜志將未得云者取置待

あまのついでに人の心をまじりてしむるは

家集 翟表 表 表

後 鞠 類 片

朝方のよきものなほさるるもたのしき物なり

兼安元年八月全玄信下三合月

言有信物

かゝる錦のよきものなほさるるもたのしき物なり

此三判者清浦の片 言信事子の信んみ

言先已子御まると 若朗詠集の織錦

機中已年相思ふ字ときよのいも九本文

と詠三まっ古人機に昔まのいもみ

錦中に三合りて 言信事やと

布

言信事

言信事

あまのついでに人の心をまじりてしむるは

布

積人不知

あまのついでに人の心をまじりてしむるは

危儀糖加加稱
此は錦仁之と云は政由也也
伊奈平花の
芳谷上
毛也極良須天
川久利也依良
筒天川
又創也
袖中十五引六瓶

ハチノミシ(細)
言信事
言信事

綿

卯六八

立恒題綿

民部病為本

十^日者^イ少^イ才^イ心^イの^イ本^イに^イた^イる^イと^イ云^イふ^イは^イ也^イ

本^イの^イ内^イに^イ也^イ

敷^イ後^イ也^イ才^イ心^イの^イ本^イに^イた^イる^イと^イ云^イふ^イは^イ也^イ

正^イ三位^イ也^イ

後^イの^イ才^イ心^イの^イ本^イに^イた^イる^イと^イ云^イふ^イは^イ也^イ

史^イ後^イ河^イ大^イ

才^イ心^イの^イ本^イに^イた^イる^イと^イ云^イふ^イは^イ也^イ

持^イ僧^イ正^イ三^イ綱^イ

才^イ心^イの^イ本^イに^イた^イる^イと^イ云^イふ^イは^イ也^イ

其^イ

下二

題^イを^イ知^イ

本^イの^イ内^イに^イ也^イ

才^イ心^イの^イ本^イに^イた^イる^イと^イ云^イふ^イは^イ也^イ

系

題^イを^イ知^イ

本^イの^イ内^イに^イ也^イ

才^イ心^イの^イ本^イに^イた^イる^イと^イ云^イふ^イは^イ也^イ

立^イ恒^イ題^イ也^イ

本^イの^イ内^イに^イ也^イ

才^イ心^イの^イ本^イに^イた^イる^イと^イ云^イふ^イは^イ也^イ

美^イ安^イ五^イ年^イ三^イ月^イ言^イ家^イ病^イ之^イ合^イ逢^イ也^イ

勝^イ今^イ法^イ也^イ

才^イ心^イの^イ本^イに^イた^イる^イと^イ云^イふ^イは^イ也^イ

立^イ恒^イ題^イ

民^イ部^イ病^イ為^イ本^イ

結^イ之^イ以^イ度^イ

西行の御歌集に於ては

高麗の甲

鴨長生

上は西行の御歌集に於ては

昔は三合度のこと

民部卿の家

西行の御歌集に於ては

西行の人

賤の御歌集に於ては

古右題

西行の御歌集

西行の御歌集に於ては

西行の御歌集

西行の御歌集に於ては

洞院権政家可く歌集

從二位親氏

西行の御歌集に於ては

西行の御歌集

前中納言定家

西行の御歌集に於ては

西行の御歌集

西行の御歌集に於ては

古右題

西行の御歌集

西行の御歌集に於ては

西行の御歌集

西行の御歌集

西行の御歌集に於ては

日

正三位知家

正三位知家

日

光俊

光俊

高

持世

持世

日

立

衣

衣

日

正三位

正三位

日

信

信

日

持

持

寛平

讀

讀

家集

西行

西行

雜

日

日

日

車

後鳥羽院御製
のりてはるる車一しんははるる車一のりてはるる車一しんははるる車一のりてはるる車一しんははるる車一

百首唐文

後鳥羽院御製

人かしのりてはるる車一しんははるる車一のりてはるる車一しんははるる車一

七十もたて昔のりてはるる車一しんははるる車一のりてはるる車一しんははるる車一

後頼朝片

かしのりてはるる車一しんははるる車一のりてはるる車一しんははるる車一

車

源有長歌片

はるる車一しんははるる車一のりてはるる車一しんははるる車一

正徳二年毎日一箇中 民部卿為家

とがしるる車一しんははるる車一のりてはるる車一しんははるる車一

永仁元年世世忽百首 為原為成

ゆきとせし車一しんははるる車一のりてはるる車一しんははるる車一

十題百首小車 前中納言定家

霜ゆくはるる車一しんははるる車一のりてはるる車一しんははるる車一

建久七年百廿八首 曰

はるる車一しんははるる車一のりてはるる車一しんははるる車一

百首云々 定家

山月あす板あつ小車一しんははるる車一のりてはるる車一しんははるる車一

古柏題

信実朝片

編

みまひの業の車少くすむたふらふにぬきまはる

百首集 芳 可子

順徳院集

里のてまのあはれん子にぬきまはる

十首集 行の

民部卿集

子にぬきまはるあはれん子にぬきまはる

東集

從信集

あはれん子にぬきまはるあはれん子にぬきまはる

題名

隨人集

あはれん子にぬきまはるあはれん子にぬきまはる

永平四年百首集

原集

世のふらのあはれん子にぬきまはる

東集

西行

あはれん子にぬきまはるあはれん子にぬきまはる

古題 由の

あはれん子にぬきまはるあはれん子にぬきまはる

月

西行

あはれん子にぬきまはるあはれん子にぬきまはる

月

東集

あはれん子にぬきまはるあはれん子にぬきまはる

月

信實集

あはれん子にぬきまはるあはれん子にぬきまはる

百首集

あはれん子にぬきまはるあはれん子にぬきまはる

久安百首

信捕

けり斗のしめあす

掛樋水鏡

前大僧正

ぬれりて夜も

後

宇治細代

祐譽

りふもたし

久本百首

侍買門院

まをりす

集

後九条内

きんぎょ

身不

日

いささ

東之

元真

昔

家集

後頼

内

離

日

万代

茶井

そら川よ岩をいさめりあせりて後の山にたどりて

大井の行者もあそびかしく人にさしきり

龍山院馬割衆

草のふもよこひのさしつかましもふあまのさり

一条大相向東馬割衆の傍より若新云

結室御所

本井のきりぬきあひこしは海のきりぬきあひ

千五百番三合 後多羽後馬割衆

いそひのきりぬきあひこしは海のきりぬきあひ

古右殿馬割衆 後多羽後馬割衆

あし山にのりてあひこしは海のきりぬきあひ

建長八年毎一為中丞様

民部卿為良

北本川の氷の川新伐多きころとてあひこしは

寶治二年百有九

保後平親氏

しらべの法衣もあひこしは海のきりぬきあひ

百有二十火多削伐 年遷住師

しらべの法衣もあひこしは海のきりぬきあひ

衣集氷伐とてあひこしは

西行上人

氷のふもよこひのさしつかましもふあまのさり

長三

あまのさりてあひこしは海のきりぬきあひ

五十三新取 丹生 檜山 木折 清人 二橋 貫 磯橋 廻作

三三好之千子と十善寺にて... 家集海路意 同

之印... 堀川院時百首 甚後

日影... 旅宿水堂... 大徳院行書

久安百首... 崇徳院西製表

仲康... 家集... 長子院方

百首旅立月雨... 少行後

又日... 仁安二年二月... 金蓮信

難波... 長元二年百首馬... 後の条内

百首... 百首百首韻... 帝中紀言

家集... 後醍醐天皇... 後醍醐天皇

家集... 光後朝

家集... 光後朝

家集... 光後朝

千五百番多合

具親の片

言何やきく如くしむるに用ひしけりし後を今

千番多

民部卿の片

くすまのりきしにけりしはすすの舟人

をりし後を今

寛正三年 毎日一冊中日

もすのりきしにけりしはすすの舟人

一字すそ

市中の言定書

千子とて如くすすの舟人

中集立之年

從二位隆心

山崎のりきしにけりしはすすの舟人

建長八年百番多合

光後卿の片

舟人判者 知家卿 言のたより 舟人判者

舟人判者 知家卿 言のたより 舟人判者

舟人判者 知家卿 言のたより 舟人判者

舟人判者 知家卿 言のたより 舟人判者

舟人判者 知家卿 言のたより 舟人判者

舟人判者

諸人不知

舟人判者 知家卿 言のたより 舟人判者

舟人判者 知家卿 言のたより 舟人判者

元真

舟人判者 知家卿 言のたより 舟人判者

光明寺の通板の文百番多合

万三

万三

三位が降る

高市里人

思福丸

相模國

光明寺

建長

洞院

初之遊船

東集

後新

中

信

隆

神

三十三日

順徳院馬割家

月一船ありせし御船に刀をぬきてたすむる白皮

弘安二年三月三日 仲舟 西本門院四家

向ふに二船ありしに仲舟舟ありしは頭後舟にさ

大永十一年舟百一箇中一を文舟 氏より家心

船を二隻ありし舟に好し平の月日と云ふ事あり

後法性寺入道用白家百箇舟子達並るに之舟

皇太后宮大夫後成心

何れ舟の船を二隻ありし船及舟舟に好しは船ありし舟

大永十一年舟 年倉屋船

昔舟とありし舟に難故に大永十一年舟に好し舟

三十箇馬に文の二箇あり 大永十一年の舟

三十三日

下二の船ありし舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟

舟に好しは船ありし舟

舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟

舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟

舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟

信濃守船 三十三日

舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟

建保三年舟百箇馬に文の二箇あり

順徳院馬割家

舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟

舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟

舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟に好しは船ありし舟

又、此の御仲例よのけの御あつり

家集母のまゝと母の

紫中母のまゝと母の

おはるまゝと母の

おはるまゝと母の

家集海のまゝと母の

殿富門院左輔

たれ(吉)

部たれのまゝと母の

平合平百為母

神祇伯仲

ねるやまのまゝと母の

内たれと母の

年富門院

おはるまゝと母の

家集母のまゝと母の

海富門院

おはるまゝと母の

片立河母の

おはるまゝと母の

高富門院

殿富門院左輔

おはるまゝと母の

三百上平首母の

おはるまゝと母の

幸子院時長根三郎左衛門の

おはるまゝと母の

家集母のまゝと母の

たきしめりあひ舟あり（キ）碓氷（ア）たきしめりあひ舟あり（キ）

五百首詩云

後鳥羽院西御集

年々しきしき舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟あり

題不知何事云

讀人不知

六綱
下りし舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟あり

家集皇事始末記 舟遊子母

五三
東風もよほし舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟あり

西國交文今合下舟あり

讀人不知

たきしめりあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟あり

五三
西行に人

たきしめりあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟あり

家集雜子母舟

舟

たきしめりあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟あり

同ら舟

たきしめりあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟あり

自昔社よりまうりける舟十首初書云

家長お片

たきしめりあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟あり

十題二首有核

権僧正之朝

たきしめりあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟ありあひ舟あり

三林苑にて梅好の露く（舟）

風方朝片

舟舟

おこしめすなりし舟に由良の舟

正治二年百有市新舟長女院入道二高親王

あつらひの舟に棹交しおとせり舟後院

堀の院馬時を舟とて舟新

後頼朝

根舟の舟に地をさへ舟の舟に舟をさへ

同院馬時を陽院より舟時舟をさへ

舟

系舟の舟に舟とて舟をさへ

家集舟とて舟

舟の舟に舟をさへ舟の舟をさへ

舟の舟に舟をさへ舟の舟をさへ

まの舟に舟をさへ舟の舟をさへ

舟の舟に舟をさへ舟の舟をさへ

家集舟の舟に舟をさへ舟の舟をさへ

舟

舟の舟に舟をさへ舟の舟をさへ

實治二年百有市新舟長女院

舟の舟に舟をさへ舟の舟をさへ

舟の舟に舟をさへ舟の舟をさへ

舟の舟に舟をさへ舟の舟をさへ

舟の舟に舟をさへ舟の舟をさへ

舟の舟に舟をさへ舟の舟をさへ

舟の舟に舟をさへ舟の舟をさへ

綱

建保三年名所同書

前中納言定成

あはれなるものゝしるしは日かたはるる君を

貞永元年惠十有二月綱意

あはれなるもの

日

人はあたまのなるものゝしるしは日かたはるる君を

るる御書首

從二位家隆

あはれなるものゝしるしは日かたはるる君を

立指題

名三内大臣

あはれなるものゝしるしは日かたはるる君を

日

民部卿為成

あはれ

あはれなるものゝしるしは日かたはるる君を

佳吉首首

意領和尙

あはれなるものゝしるしは日かたはるる君を

童子の繪は佳吉社まゝしてはるる君を

く所

糸立指親

あはれなるものゝしるしは日かたはるる君を

下十一

あはれなるものゝしるしは日かたはるる君を

下十二

あはれなるものゝしるしは日かたはるる君を

馬集震陽浦

後徳大寺大臣

あはれなるものゝしるしは日かたはるる君を

春傳牙中夜

日

あゝあゝ辛屋川はのちあゝとてあゝとてなるは

永久四年百有泉部 後頼朝片

ていすの細い舟は方よりつらきる中へ

題名如

瀆人不知

大さの内まじりもあはれいふの海は

三百六十石の中

如患

三交浦の細い舟はあゝとてあゝとてなるは

西の國へつらきるあゝとてあゝとてなるは

業司部

はあゝとてあゝとてあゝとてあゝとてなるは

寛政元年女御入内清屏岡海邊の細

お中夜言ひ

あゝとてあゝとてあゝとてあゝとてなるは

人あゝとて

後頼朝片

あゝとてあゝとてあゝとてあゝとてなるは

く女有首

お中夜言ひ

あゝとてあゝとてあゝとてあゝとてなるは

日

前奉議親隆卿

あゝとてあゝとてあゝとてあゝとてなるは

お中夜言ひ

中務卿部

あゝとてあゝとてあゝとてあゝとてなるは

日

正三位

あゝとてあゝとてあゝとてあゝとてなるは

信實朝臣

仁安三年無動寺（新六）

隆實

人見...

真梁

建保三年名所百首

僧正行意

...

洞院栲政

...

古拓題

正三位

...

...

...

家集八則

...

...

中務親

...

...

...

信實朝臣

...

日

光緒朝片

Handwritten cursive script, likely a date or header.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

△四百三十八
旋頭第一
長五
文一五早

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

夫木和哥村卷第三十四

雜部 十六

題

神祇

付社

釋教

付寺

神祇

久首首神祇三申

たきまはり神

あまのつとむしとて一昔より神とて君とて
いふたふらむとてかたむせのまゝとて
いふたふらむとてかたむせのまゝとて

前大田屋隆孝

ふくまのつとむしとて一昔より神とて君とて

社頭秋風

深倉重長

ふくまのつとむしとて一昔より神とて君とて

御集神祇

同

ふくまのつとむしとて一昔より神とて君とて

神祇三

度々仲房

君代のころはさうさうや藤のすさぶるお井の水

長うみま

坂の部中

そのころはさうさうや藤のすさぶるお井の水

東集お祇方

民部局の事

やうき光さるお水さうさうさうさうさうさう

お杉の下さうさうさうさうさうさうさうさう

文永十三年毎百一書云

お水のころはさうさうさうさうさうさうさう

久安百書お祇方 真徳朝片

お水さうさうさうさうさうさうさうさう

東集

惠康住持

お水さうさうさうさうさうさうさうさう

お水さうさうさうさうさうさうさうさう

お水さうさうさうさうさうさうさうさう

お水さうさうさうさうさうさうさうさう

お水さうさうさうさうさうさうさうさう

お水

十題百首

前中地言定書

お水さうさうさうさうさうさうさうさう

三社事

日

お水さうさうさうさうさうさうさうさう

永久の百首林

後朝朝片

お水さうさうさうさうさうさうさうさう

清集寄書

後朝朝片

あつたはれはむらさきをうらなふ花をさるる花に
のまの昔の今 古馬門内片

柳をたのむはるのまはらまをさるる花に
三百平首馬三片 後九条内片

ゆきまの雪をさるる花にまをさるる花に
家集 福成片

ゆきまの雪をさるる花にまをさるる花に
建長七年卯朔端末片

ゆきまの雪をさるる花にまをさるる花に
後三行末

ゆきまの雪をさるる花にまをさるる花に
光後片

ゆきまの雪をさるる花にまをさるる花に
前大納言隆平

ゆきまの雪をさるる花にまをさるる花に
善徳祇祈年祭 前申納言定長

ゆきまの雪をさるる花にまをさるる花に
正應五年三傳社十有末社頭祝

ゆきまの雪をさるる花にまをさるる花に
糸洋為相

ゆきまの雪をさるる花にまをさるる花に
大たえの書通百首

ゆきまの雪をさるる花にまをさるる花に
西行片

ゆきまの雪をさるる花にまをさるる花に
評哉

此の後、山崎の社りまゝりけること
したるまゝりて田圃の方へ降りて方に
よまゝりて半しとて仁安三年十月十
日の夜まゝりて幣まゝりてすゝとて半と
の社へ降りてまゝりては施をりける程に
本より月乃方のくまゝりて半とて半と
を言ふまゝりて半とて半と

三橋社をまゝりける社東如する云 藤

権僧正之朝

山崎の社
山崎の社

浅野田

白

山崎の社
山崎の社

みる田の面を言ふは山崎の社を言ふは
みる田の面を言ふは山崎の社を言ふは

蟻蟬

同

みるの田の面を言ふは山崎の社を言ふは

山崎の社

後九条田

天は月日とて山崎の社を言ふは

久安百首

実信の片

みるの田の面を言ふは山崎の社を言ふは

仁安三年十月十日

後鳥羽院御製

みるの田の面を言ふは山崎の社を言ふは

家集の社

あはれ人

みるの田の面を言ふは山崎の社を言ふは

文治三年の社百首伊勢

皇太后宮宮主俊成

山崎の社
山崎の社

山崎の社
山崎の社

山崎の社

人事の枝のまゝなほしむるのすゑも
百之馬年 宣徳和尙

神らしりて世のまゝに
大神まゝに 僧正行意

神のまゝに
赤陽門院

神のまゝに
後三位行光

神のまゝに
光明寺入方極致家百首

神のまゝに
後二位光隆

神のまゝに
後系極致

神のまゝに
從二位光隆

神のまゝに
赤陽門院

神のまゝに
從二位光隆

神のまゝに
赤陽門院

神のまゝに
赤陽門院

神のまゝに
赤陽門院

○大正十一年の自叙の事
小書をよみまわす

貫之

○大正十一年の自叙の事

大正十一年の自叙の事

後頼朝

○大正十一年の自叙の事

大正十一年の自叙の事

○大正十一年の自叙の事

大正十一年の自叙の事

○大正十一年の自叙の事

大正十一年の自叙の事

○大正十一年の自叙の事

野宮

○大正十一年の自叙の事

後醍醐天皇

○大正十一年の自叙の事

後醍醐天皇

○大正十一年の自叙の事

後醍醐天皇

○大正十一年の自叙の事

後醍醐天皇

○大正十一年の自叙の事

後醍醐天皇

○大正十一年の自叙の事

月

斎部有衣

男いひまゝに社者の母をひかへての事

月

後成

沖まに社者の母をひかへての事

日

家長朝長

男いひまゝに社者の母をひかへての事

同社之令

日

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

専慶はゆ

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

後の案内

月

湯山社者の母をひかへての事

社者

Hime

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

湯山社者の母をひかへての事

建長八年四月廿一日

光後朝片

河内守藤原朝隆

御書

成平法師

三つに今多しと云ふは

久安百有九神祇

大言文

目吉社意

は橋頭船

下

此哥判者

日本記

作は諸尊

後

家集神祇

友長結

三山

此

天

新

錯

常

下

おまの... 此の... 十町斗
の... 後高橋...
... 中...
... 十町斗
... 後高橋...
... 中...

庫の社

後高橋

おまの... 庫の社... 後高橋... 中...

△巻二初巻已出
三月五箇長
江野在開略

おまの... 系洋雅經... 從二位...
光明寺寺入道...
大藏...
... 系洋雅經...
... 從二位...

白の... 加賀

系洋雅經

家集... 祇

從二位

△元祿
... 久...

おまの... 十題百首... 家集...
... 十題百首...
... 家集...

十題百首

家集

おまの... 家集

家集

明治三十二年十月一日

正三位孝純
殿
白首云

貴族院議員

社 志士の

君の志士社に

社 志士の

白首のたし

長集 平ら

後頼朝下

社 志士の

社 志士の

祝部師賢

方代のり

同右白首中

ちんり

仁安三年

友伴

ふやぬ

正安三年

あゆ

百

お

十題

長於遺教能因

島中古神の神方まゝの神 昔又の神

社団法人

下... 社団法人

文永八年毎日百番中 民部卿の御

おとししる尾の事... 社団法人

寶曆三年百番中

社団法人

社団法人

屏風... 社団法人

社団法人

社団法人

寶曆三年百番中 社祝

大和

社団法人

社団法人

社団法人

社団法人

社団法人

社団法人

社団法人

社団法人

社団法人

社団法人

社団法人

社団法人

相模國之江山奉納云々

前大僧正隆并

少くものりふりたしん

東集志を由陸奥 為仲の片

とるふりたしん

十題首者決祇白山

お中納言定家

日吉社十中首三合

後京極権取

新古神祇

信成知日吉社

從二位上隆

あつた

△匠材集り物上十ハハク及指さす
かへりはるるハハク及指さす
十ハハク及指さす
△白比呂見神社

月社令社及書月 前中納言定家

たのむ

文永五年毎日一箇中神祇云

出款卿為家

くち

お

お

江中白古一冊神文

お

園其端

お

たのむ

法橋石船

此の判去者代々より今も此の
此の判去者代々より今も此の
此の判去者代々より今も此の

初集意文苑抄

金蓮法師

此の判去者代々より今も此の

清集心文苑抄

唐順 藏不

交益内之片

此の判去者代々より今も此の

水心大書舎

前中幼言後光師

此の判去者代々より今も此の

唐順心

現存

諸神里近江
子載左子録心

初集心文苑抄 如泉三郎

此の判去者代々より今も此の

海蓮法師

此の判去者代々より今も此の

此の判去者代々より今も此の

此の判去者代々より今も此の

初集月三申 後抄心片

此の判去者代々より今も此の

慈法和尚

此の判去者代々より今も此の

大正三

此のころ... 信濃の国... 権僧正の朝

昔より... 建保元年十月...

意鎮和尚

君代... 古田題社... 衣の因石

やと... 兼元三...

前中納言

あつて... 後輪... 文永三年...

正頼卿

大ま... 弘安百首...

檢校信親

あまの... 弘安百首...

みまらしきまのこころをいふは
論の三種菩提心は影心

西行上人

おのれをたすけしむるは
毎百一箇中戒

民衆をたす

無量義經船師大船師

皇太后宮中使後威

結華經廿八品中序品悉捨王位

法のたすけしむるは

皇領和尚

廣度諸衆生其數無有量

新古の
おのれをたすけしむるは

皇太后宮中使後威

曼殊沙花梅檀香風

西行上人

おのれをたすけしむるは

皇領和尚

方便品諸佛世尊唯笑事因緣故出現於世

おのれをたすけしむるは

西行上人

皇領和尚

おのれをたすけしむるは

西行上人

おのれをたすけしむるは

皇領和尚

深着於五欲如猫牛愛尾

皇太后宮女後成

高妙の機ありてしむるに似たり

譬喩不猶如火也 並領和尙

まじりても世の中にあらざるものあり

其中亦生悲是吾子

後成

已の^{新勅七反}まじりても世の中にあらざるものあり

日文 西行上人

ちよとてそとにあらざるものあり

衣集 譬喩あり

家隆師

しきせしむるに似たり 子成ておれまゝなるものあり

信解品 从佛道聲 並領和尙

まじりても世の中にあらざるものあり

其上實飛を求自得 後成師

まじりても世の中にあらざるものあり

是時高子國文此言而大執衣得未曾有

西行上人

まじりても世の中にあらざるものあり

藥草喩品 汝等所行是菩薩道

並領和尙

まじりても世の中にあらざるものあり

我觀一切普皆平等之有彼此也憎之心

後成師

若留持者我即歎哉

信成卿

まきくもくひのたまはしよたまを佛よる心も
手把虚空而以遊行亦未為難移諸天人晝夜

信成

信成卿

^{玉慈}あつとくもたるとはやまものりにあまのり
移諸天人晝夜土 哀慎和尚

三つしよるのてつとちるにおもひきりる心も

授學昌龍女成佛 曰

たまはしよるをみし海月をそよぬたよのり

髮中明珠

西行上人

今そそつたよのりてんてんてんてんてん

採薪及菓旅隨時表教子

信成卿

たきくもくひのたまはしよたまを佛よる心も

曰文

曰

たまはしよるをみし海月をそよぬたよのり

執持昌我不受身命但措無上意

西行上人

たまはしよるをみし海月をそよぬたよのり

何故憂色

哀慎和尚

たまはしよるをみし海月をそよぬたよのり

女樂行昌常者是好夢

曰

相好の如くもれしものなりたれにうせりし
深入禅定見十方佛 後成卿

志願の如くもれしものなりたれにうせりし

曰文

西行上人

十三年の如くもれしものなりたれにうせりし

涌出品得成寂正覺特異には痛

曰

交し申す人たにまじりてまじりてまじりて

從地而涌出

後成卿

地水の如くもれしものなりたれにうせりし

みより而も

養鎮

たれにうせりしものなりたれにうせりし

壽量品奉命と云教劫

曰

今まに佛の如くに今まに佛の如くに

傳入と云と道達成乾佛身

曰

佛の如くに今まに佛の如くに今まに佛の如くに

曰文

西行上人

今まに佛の如くに今まに佛の如くに今まに佛の如くに

現有減不減

後成卿

今まに佛の如くに今まに佛の如くに今まに佛の如くに

常在靈龍馬山

家隆卿

今まに佛の如くに今まに佛の如くに今まに佛の如くに

分別功德品不久詣道場

善信如鳥

若坐若經行除睡常拱心

後成痴

若坐若立若經行好功德

西行上人

隨衣功德品如說而終行其福可限

白

如是展轉教

慈悲如鳥

寂後亦幸中一偈隨衣

後成痴

谷川新和紙の事とくし今まきいふ事

友の引

法師功德品是人持此經安住希有地

慈悲如鳥

又如淨明鏡悉見諸色像

唯獨自明餘人所不見西行上人後成痴
常不恒品時乃得因是法華經

西行上人

秋深敬汝等 善領知尚

而於擲之避其苦後 後成痴

神力品如來一切秘密之藏

西行上人

於秋賦度後應受持斯經是人於仙道交定

無有敬

善信知尚

能持是經者則為已見我

此部所雅有

佛之智慧如來智慧自然智慧

佛之智慧如來智慧自然智慧

善信知尚

佛之智慧如來智慧自然智慧

西行上人

法華のまゝのむらとほいぬわくをきりてふ人
今以甘属海等 後成心

阿耨多羅三藐三菩提の因正しくなりてきりてふ人

句品

雅有源

法華のまゝのむらとほいぬわくをきりてふ人
法華のまゝのむらとほいぬわくをきりてふ人

藥王品 容顏甚奇妙 光明照十方

西行上人

たたらさきたあき家やうりけの目とる感り

廣宣流布

慈徳

玉照交

法のれらぬをきりてふ人

即往安樂世界

後成心

あまのれらぬをきりてふ人

妙音品 及衆難處皆能救濟

新法華

句

あまのれらぬをきりてふ人

正使和合百千日月其面白端正

西行

神心よまゝのむらとほいぬわくをきりてふ人

八万四千衆寶蓮華 慈徳

法華のまゝのむらとほいぬわくをきりてふ人

普門品 施之為者 句

法華のまゝのむらとほいぬわくをきりてふ人

弘誓言 深如海 歷劫不思議

後成心

大正歳社十早番三合

意信

宗文の浦久屋のしんをいれ龍のしん首を

西子首首尾を

月

ふむいお月しりあひる見のふふはしん首を

家集舎利講堂中国法

年蓮

龍のしんをいれあひるのふふをいれしん首を

建保三年丙子月首首釋迦

後二位家隆

しんをいれしん首をいれしん首をいれしん首を

久安首首一通三為一系佛性

市衣議教長

まれくしん首の車とすしん首のりま建ふ人あはす

法花經妙莊嚴王品

銅浦郷 五重

しん首のしん首をいれしん首をいれしん首を

お上首首三合

年蓮はゆ

谷水首首のしん首をいれしん首の首をいれしん首を

善内十のしん首をいれしん首を

生殿

しん首の首をいれしん首の首をいれしん首の首を

久安首首代縁大系の姓名各別

市衣議教長

おのれにふりかへりては、
真言の心
鎌倉右大臣

大日如来の御心は、
華嚴寺藏書に在り

般若心院大補

生花のやうに、
華山院馬寮

はるかに、
後事務格取

月

よき身は、
おぼろしき佛心

建長三年百廿八箇額云

前中納言定成

おのれにふりかへりては、
叔教中
信下定用

おのれにふりかへりては、
應之所行らるる其心代あらん

おのれにふりかへりては、
立拓題
右大臣

おのれにふりかへりては、
夫後嗣長

おのれにふりかへりては、
日吉社百首詩云
定成

新立
日二井
兼并心出

〜〜〜
家集の教義
殿高の院有捕

〜〜〜
六条院の旨

〜〜〜
百首の旨

〜〜〜
百首の旨

〜〜〜
天王寺百首
日

〜〜〜
聖の旨
九石の平床の旨
百首の旨

〜〜〜
家集の旨

〜〜〜
天王寺隆堂意鎮和尚の旨
九石の旨

〜〜〜
百首の旨

信の臣と侍と 僧の信信

Funerary tablets in Japanese style

Funerary tablets in Chinese style

中 從二位家隆

鄭氏の... 鄭氏の... 鄭氏の...

目お親と 為す

海に入らぬ... 海に入らぬ...

百... 諸佛... 諸佛... 諸佛...

友お死

三層... 三層... 三層...

東集... 東集... 東集...

後頼朝

孫千祿

弟の... 弟の... 弟の...

當知本... 當知本... 當知本...

白誓親王

は... は... は...

三... 三... 三...

二... 二... 二...

親証禁母縁と 曰

ふ... ふ... ふ...

護摩上人

あ... あ... あ...

此... 此... 此...

上縁の... 上縁の...

田舎人

Handwritten text in cursive script, likely a list or index.

Handwritten text, possibly a section header or separator.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or index.

Handwritten text, possibly a section header or separator.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or index.

Handwritten text in cursive script, likely a list or index.

Handwritten text, possibly a section header or separator.

Handwritten text, possibly a section header or separator.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or index.

Handwritten text, possibly a section header or separator.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or index.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or index.

現存

他方の

田舎の人

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり
十題百有十地現前地

前中納言定長

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり

板東上時増と 皇太后宮女後成

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり

日

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり

日

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり

新勅

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり

見

日

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり

普賢大菩薩至

日

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり

時自然に無殺の妙花散乱ス

日

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり

此のよき守りていさなきみく候あり神のみたくりり

新紙

歸正或ハ金蓮花の中金色淨土の如也或ハ
彌陀國の中淨彌陀淨土の如也

少き夜のひかりも之も走つて月付かかるとも云ふ

此より中夜時夜の境替界剛半夜に至

程三五の人と共に如所金蓮道歩界衆實

国土の境思の来替安示たつち見光あき聲こゑ

淨土書しよの界まに異ちがは

并なに我々の心こゝろもたれ居ゐるものありまの事

はたして心こゝろもたれ居ゐるものありまの事

此より曉到あけに辰たつちの交ま金かねノ存ぞんニ寄より程ほど欲ほ暁あけ

スレハ因よノ音ね殊こと者もの也なり正ただに除とく

題だい之の如ごとし

前津師承觀

公平方十二箇ノ

一ノ事

後巻

よしに心こゝろもたれ居ゐるものありまの事

釈しやくの如ごとし

原空上人

何なにに淨土じゆんに由よりて心こゝろもたれ居ゐるものありまの事

極ごく小せうの心こゝろもたれ居ゐるものありまの事

何なにに淨土じゆんに由よりて心こゝろもたれ居ゐるものありまの事

何なにに淨土じゆんに由よりて心こゝろもたれ居ゐるものありまの事

此四首しよ之の指南しゆんお申まをす

中ちゆう此こゝあり僧そうの号ごうニ僧そう三人さんあり

續つづ人ひとの如ごとし

長ながき日ひに心こゝろもたれ居ゐるものありまの事

極ごく小せうの心こゝろもたれ居ゐるものありまの事

此こゝより或ある人ひと三さん心こゝろあり

玉紙

世よに玉たま

しんがくおのりしむくはるかきふのふり
此年小倉山院花の落しにありては
伴ふふりしむくはるかきふのふり

古拓題

信実 准后

しんがくおのりしむくはるかきふのふり

寺々

日

しんがくおのりしむくはるかきふのふり

友集寺秋院

市部御雅有

しんがくおのりしむくはるかきふのふり

古月

日

しんがくおのりしむくはるかきふのふり

永仁元年 毎日一萬年 為安

小倉山こくらやまの寺々てらのふり

永仁元年 九月十日 古寺暮秋

た真お内実

しんがくおのりしむくはるかきふのふり

日

大納言実表

しんがくおのりしむくはるかきふのふり

赤元二年 或御新王 水信千着文 山寺

衆議為相

しんがくおのりしむくはるかきふのふり

寺

日

しんがくおのりしむくはるかきふのふり

寺

日

おのり百番三合

前中納言定次（印）

おのり百番三合の御用度定次（印）

六指題の御用度定次（印）

おのり百番三合の御用度定次（印）

六指題の御用度定次（印）

おのり百番三合の御用度定次（印）

六指題の御用度定次（印）

おのり百番三合の御用度定次（印）

六指題の御用度定次（印）

花山院内大臣

おのり百番三合の御用度定次（印）

六指題の御用度定次（印）

おのり百番三合の御用度定次（印）

民部卿定次（印）

六指題の御用度定次（印）

おのり百番三合の御用度定次（印）

六指題の御用度定次（印）

おのり百番三合の御用度定次（印）

六指題の御用度定次（印）

民部卿定次（印）

おのり百番三合の御用度定次（印）

六指題の御用度定次（印）

豊光右衛門定次（印）

おのり百番三合の御用度定次（印）

五秋下

建長三年秋お前寺末千尋

從二位行末

予少時より僧にすべしとたねいひてまゝにすべし

新抄

禅林寺時多^{時多}前律師永觀

又義^義のきりくをまじりて青のうらをい

家集舟寺僧のてりてし^所のうらをい

このころのうらをい夜中^{誦經}のうらをい

永久四年百有^{山藏}寺

為忠房

お前寺のうらをいお前寺のうらをい

三森

後寺見立信水藏 後惠法師

このころのうらをいお前寺のうらをい

新六三

六指題寺

夜堂内書長

このころのうらをいお前寺のうらをい

大僧正源惠泉障子陰関寺秋

前大僧道隆

お前寺のうらをいお前寺のうらをい

六指題寺の寺名 正三位お前

このころのうらをいお前寺のうらをい

お前寺のうらをいお前寺のうらをい

お前寺

お前寺のうらをいお前寺のうらをい

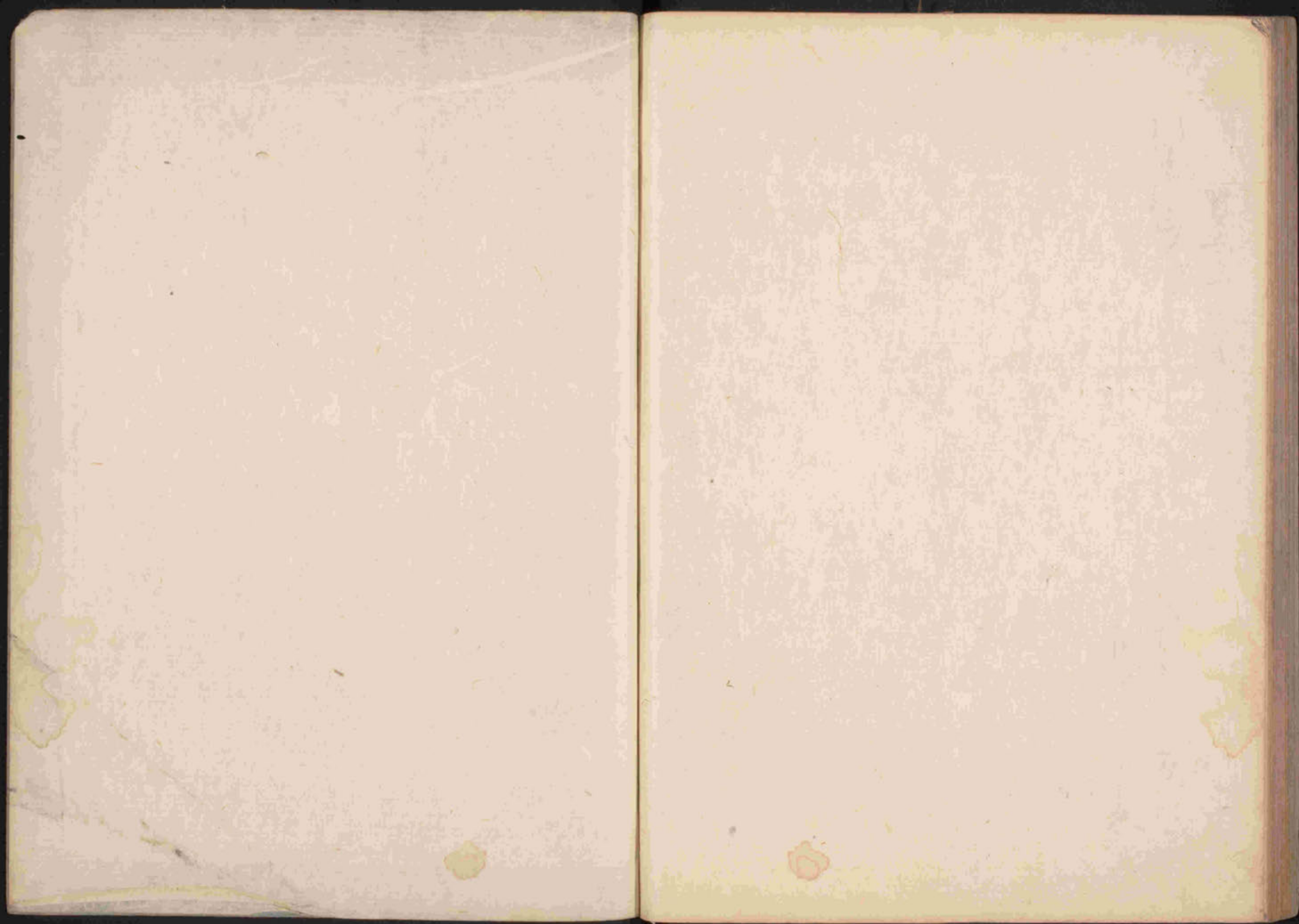
お前寺のうらをいお前寺のうらをい

お前寺のうらをいお前寺のうらをい

四百七十六
長一

賀正百有馬
日
し之の...
同為の...
之

寛永十一年十月
八筆校命了





110X
495
21